

# 大学生の英文法に対する意識・態度・行動に関する量的研究 —英文法の学習・指導方法への示唆—

大 城 直 人

## 要 約

本研究では、大学生の英文法に対する意識・態度・行動について、量的研究手法に基づいて分析を試みた。その結果、英文法に習熟することが自信の涵養や英語熟達度の向上と深く関わっていることを明らかにした。また、中学・高校における英文法学習の充実を図ることが、学習者の自律を促し、学習全体の管理・調整を担うメタ認知的方略の習得・使用を可能にすることも確認できた。さらに、英語4技能の中で学習者が得意とする分野の取り組みを通して英文法を学習することで、学習が効果的に行われる可能性があることについても示唆することができた。加えて、英文法の明示的知識の習得が、多岐に渡って重要であることを改めて示すことができた。これらの結果を踏まえ、英文法の学習・指導方法への提案として、明示的な文法指導の意義、知識の手続き化を通して明示的知識から暗示的知識へ変換を図ることの重要性、そしてインプットとアウトプットのバランスを図りながら4技能統合型の文法指導を行う必要性を説いた。今日の英語科教育において、コミュニケーションが重視される一方で、その下位知識を構成する英文法の学習・指導が軽視される風潮にあるが、外国語として英語を学ぶEFL (English as a foreign language) の環境にあつては、また、学習者の母語の習得が確立された後であれば、やはり英文法の明示的な学習が重要であることを、本研究では量的データに基づいて示すことができた。

キーワード：英文法、英語熟達度、自信、英語4技能、英文法の学習と指導

## 1. 研究の背景と目的

世界の英語使用者の人口統計をひも解くと、英語母語話者の人口は約4億人、第二言語及び外国語として英語を使用する人口は約11億人に達する (Crystal, 2012)。これは、2000年当時の人口に基づき算出された推計で、現在では英語使用者数は20億を超えるとも言われている。実に、世界人口の4人に1人が英語を使用していることになる。また、世界における人文社会科学分野の定期刊行物の75%、自然科学分野では90%以上が英語で書かれ、世界中のコンピュータに保存されている情報の80%が英語を媒体としている。さらに、国際オリンピック委員会やサッカーワールドカップなど、スポーツの世界でも英語が公式言語となっている。これらの事実は、国際社会において英語が確固たる地位を築いていることを如実に示している。

このような英語を取り巻く世界情勢を踏まえ、文部科学省も、2002年(平成14年)に「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を公表し、それを踏まえ2003年(平成15年)には「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定した。また、2011年(平成23年)には「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(2011年)が示され、コミュニケーション能力の育成や英語学習に対するモチベー

ションの向上を図る英語教育の在り方などについてもまとめられている。英語教育改革が進む中、学校で使用される英語教科書の内容も、特に中学校においては、コミュニケーション能力の育成が意図され、英会話中心のダイアログ形式のものへと改訂されてきた。

意思の疎通や相互理解を図ることが言葉の本質であることを考えると、そのためのコミュニケーションを重視することは理にかなっていると言える。従って、コミュニケーション重視の英語教育は一見すると正論に思われる。しかしながら、コミュニケーション重視の政策が、英語教育の危機的状況を招く元凶となっていることもまた事実である。斉田(2014)は、高校1年生を対象に経年調査を行い、高校入学時の英語力が1995年から14年連続で低下していることを突き止めた。また、寺島(2009)は、会話中心の授業では生活言語の語彙しか身に付かず、学習言語としての語彙は蓄積されないため、結果的に会話力は育たない、とコミュニケーション重視の英語教育に警鐘を鳴らしている。さらに、大津(2013)は、コミュニケーション重視の英語教育では、言語能力の本質である創造性を担保する英文法が軽視されており、それが深刻な問題であると指摘している。

コミュニケーションを重視する昨今の英語教育で

は、「コミュニケーション=会話」という捉え方が支配的で、英語を話す能力の育成に多くの力が注がれ、文法の学習・指導が軽視される傾向が散見される。コミュニケーション能力とは、Canale (1983)によれば、「文法能力」(grammatical competence)、「社会言語能力」(sociolinguistic competence)、「談話能力」

(discourse competence)、「方略的能力」(strategic competence)の4つの下位知識によって構成されている。であるならば、真のコミュニケーション能力を育成するためには、文法の学習・指導は不可欠であり、その重要性・必要性が十分認識されなくてはならない。そ

こで、本研究では、大学生を対象に、過去・現在における英文法に対する意識・態度・行動に着目し、技能面・情意面の2つの側面から多面的に考察を行う。また、考察を踏まえ、英文法の効果的な学習方法や指導方法について提言する。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査協力者と調査手続き

本研究の調査協力者は、沖縄キリスト教学院大学人文学部英語コミュニケーション学科に在籍する教職科目を履修する2年生から4年生までの44名であった。性別の内訳は男性7名、女性37名で、平均年齢は21.1歳 ( $SD: 3.31$ ; 19歳~40歳)であった。教職課程を履修している学生を対象としたのは、教職課程における学びを通して、英文法に対する意識・態度・行動にも変化が生じるかということについて検証することも可能になると考えたからである。

2017年10月に、教職科目の授業担当者の協力を得て、授業時間の一部を利用し、質問紙調査を実施した。所要時間は10~15分程度であった。

### 2.2 調査内容

質問紙(付録参照)は、性別・年齢、英語学習開始時期や英語熟達度など、調査協力者の属性に関する質問項目11項目と、英文法に関する意識・態度・行動に関する質問項目40項目の2部門から構成された。質問紙は無記名とし、一般論としてではなく、調査協力者自身の考えに基づいて回答するよう明記した。回答は、「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. あまり当てはまらない」、「4. やや当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常に当てはまる」の6件

法で回答を求めた。偶数個のリカート尺度を用いたのは、調査協力者が適当に中立的な選択肢(「どちらでもない」)を選ぶのを回避し、より正確な回答を得るためであった。

## 2.3 分析方法

本稿では、「英語力に対する自信の有無」、「英語熟達度の差異」、「中学・高校における英文法学習の実態」、「英文法に対する得意・不得意の自己評価」、「英語4技能の得意分野」の5つの観点から、英文法に対する意識・態度・行動について、2変数間の平均の差を分析した。また、「英文法の有用性」、「英文法と英語4技能の向上の関係性」、「英文法の習得方法」の3点にも着目し、英語熟達度の上位群と下位群の2変数間の平均の差の分析を行った。分析に際しては、IBM社のSPSS Statistics 23.0を使用した。

## 3. 分析結果

### 3.1 英語力に対する自信の有無による比較

「自分の英語力に自信がある」(質問2)という質問に対して、「6. 非常に当てはまる」・「5. 当てはまる」と回答した11名を自信高群、「1. 全く当てはまらない」・「2. 当てはまらない」と回答した10名を自信低群と分類し、質問2を除く全ての質問項目について、自信高群と自信低群の2変数間の平均の差を比較した。

その結果(表1)、「Q01. 英文法は得意だ」( $t(19) = 3.39, p < .003, d = 1.5$ )、「Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている」( $t(19) = 4.47, p < .000, d = 1.96$ )、「Q31. 普段から英語に触れるように心がけている」( $t(19) = 3.16, p < .005, d = 1.38$ )、「Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」( $t(19) = 3.14, p < .005, d = 1.37$ )の5項目では0.1%~1%水準で、「Q06. 英語の勉強の仕方が分からない」( $t(19) = -2.67, p < .015, d = 1.16$ )、

「Q16. 英文法を知らなくても英語は読める」( $t(19) = -2.33, p < .031, d = 1.02$ )、「Q25. 中学・高校で英文法をあまり学ばなかった」( $t(19) = -2.40, p < .027, d = 1.05$ )、「Q33. 英語を書くときに英文法の知識が役立った」( $t(19) = 2.77, p < .012, d = 1.21$ )、「Q39. 英語4技能の中で、スピーキングが一番得意だ」( $t(19) = 2.69, p < .014, d = 1.18$ )の5項目では5%水準で、自信高群と自信低群との間で有意差が確認された。

表 1 英語力自信高群・低群の質問項目平均値と SD 及び t 検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	自信高群	自信低群	t 値
Q01. 英文法は得意だ	5.00 (0.94)	3.45 (1.13)	3.39**
Q06. 英語の勉強の仕方が分からない	2.50 (1.43)	4.09 (1.30)	-2.67*
Q16. 英文法を知らなくても英語は読める	3.00 (1.33)	4.18 (0.98)	-2.33*
Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている	5.30 (0.82)	3.36 (1.12)	4.47***
Q25. 中学・高校で英文法をあまり学ばなかった	2.40 (1.78)	4.09 (1.45)	-2.40*
Q31. 普段から英語に触れるように心がけている	5.60 (0.70)	4.18 (1.25)	3.16**
Q33. 英語を書くときに英文法の知識が役立った	5.70 (0.68)	4.73 (0.91)	2.77*
Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった	5.10 (0.99)	3.73 (1.01)	3.14**
Q39. 英語 4 技能の中でスピーキングが一番得意だ	4.10 (1.29)	2.82 (0.87)	2.69*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

### 3. 2 英語熟達度の差異による比較

英語熟達度については、「5. 中上級レベル (英検準1級以上 / TOEIC 730点以上)」、「4. 中級レベル (英検2級程度 / TOEIC 530~720点程度)」、「3. 初中級レベル (英検準2級程度 / TOEIC 450~520点程度)」、「2. 初級レベル (英検3級程度 / TOEIC 270~440点程度)」、「1. 基礎レベル (英検4級以下 / TOEIC 260点以下)」の5段階の尺度から、調査協力者の自己申告に基づき、中級レベル以上から無作為に抽出した10名を英語熟達度上位群、初中級レベル以下の12名を英語熟達度下位群に分類し、全ての質問項目について、英語熟達度上位群と英語熟達度下位群の2変数間の平均の差を比較した。

その結果 (表 2)、「Q01. 英文法は得意だ」 ( $t(20) = 4.00, p < .001, d = 1.71$ )、「Q02. 自分の英語力に自

信がある」 ( $t(20) = 2.99, p < .007, d = 1.28$ )、「Q06. 英語の勉強の仕方が分からない」 ( $t(20) = -3.07, p < .006, d = 1.31$ )、「Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている」 ( $t(20) = 4.38, p < .000, d = 1.88$ ) の4項目では0.1%~1%水準で、「Q10. 英語4技能の中でライティングが一番得意だ」 ( $t(20) = 2.47, p < .023, d = 1.06$ )、「Q33. 英語を書くときに英文法の知識が役立った」 ( $t(20) = 2.44, p < .024, d = 1.04$ )、「Q34. 英語をたくさん読んでいれば自然と英文法の知識も身につく」 ( $t(20) = 2.38, p < .027, d = 1.02$ )、「Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」 ( $t(20) = 2.48, p < .022, d = 1.06$ )、「Q40. 英文法の学習は好きだ」 ( $t(20) = 2.17, p < .042, d = 0.93$ ) の5項目では5%水準で、英語熟達度上位群と英語熟達度下位群との間で有意差が確認された。

表 2 英語熟達度上位群・下位群の質問項目平均値と SD 及び t 検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	上位群	下位群	t 値
Q01. 英文法は得意だ	4.90 (0.99)	3.58 (0.52)	4.00**
Q02. 自分の英語力に自信がある	4.20 (0.79)	3.00 (1.04)	2.99**
Q06. 英語の勉強の仕方が分からない	2.30 (1.16)	3.75 (1.06)	-3.07**
Q10. 英語4技能の中でライティングが一番得意だ	4.40 (1.51)	2.92 (1.31)	2.47*
Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている	5.50 (0.71)	4.08 (0.79)	4.38***
Q33. 英語を書くときに英文法の知識が役立った	5.70 (1.07)	4.83 (1.06)	2.44*
Q34. 英語をたくさん読んでいれば自然と英文法の知識も身につく	5.30 (0.95)	4.42 (0.79)	2.38*
Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった	5.10 (0.99)	3.83 (1.34)	2.48*
Q40. 英文法の学習は好きだ	5.50 (0.85)	4.58 (1.08)	2.17*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

### 3. 3 中学・高校における英文法学習の実態による比較

「中学・高校で英文法をしっかり学んだ」 (質問7) という質問に対して、「6. 非常に当てはまる」・「5.

当てはまる」と回答した13名を英文法学習群、「1. 全く当てはまらない」・「2. 当てはまらない」と回答した11名を英文法非学習群と分類し、質問7を除く全ての質問項目について、英文法学習群と英文法非学習

群の2変数間の平均の差を比較した。

その結果(表3)、「Q15. 英文法を学ばないと英語は習得できない」( $t(22) = -2.97, p < .007, d = 1.22$ )、「Q29. 積極的に資格試験(英検/TOEIC等)に挑戦している」( $t(22) = 3.63, p < .001, d = 1.49$ )の2項目では1%水準で、「Q14. 英文法の学習は好きで

はない」( $t(22) = -2.64, p < .015, d = 1.08$ )の1項目では5%水準で、英文法学習群と英文法非学習群との間で有意差が確認された。また、「Q30. 計画を立てて英語の勉強に取り組んでいる」( $t(22) = 1.89, p < .079, d = 0.72$ )では、10%水準で有意傾向(効果量は中程度)が認められた。

表3 英文法学習群・非学習群の質問項目平均値とSD及びt検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	文法学習群	文法非学習群	t 値
Q14. 英文法の学習は好きではない	2.31 (1.18)	3.64 (1.29)	-2.64*
Q15. 英文法を学ばないと英語は習得できない	2.92 (1.32)	4.27 (0.79)	-2.97**
積極的に資格試験(英検/TOEIC等)に挑戦している	5.23 (0.93)	3.73 (1.10)	3.63**
計画を立てて英語の勉強に取り組んでいる	3.69 (0.84)	2.91 (0.74)	1.89†

†.05 < p < .10, \*p < .05, \*\*p < .01

### 3.4 英文法に対する得意・不得意の自己評価による比較

「英文法は得意だ」(質問1)という質問に対して、「6. 非常に当てはまる」・「5. 当てはまる」と回答した12名を文法得意群、「1. 全く当てはまらない」・

「2. 当てはまらない」と回答した10名を文法不得意群と分類し、質問1を除く全ての質問項目について、文法得意群と文法不得意群の2変数間の平均の差を比較した。

その結果(表4)、「Q02. 自分の英語力に自信がある」( $t(20) = 3.36, p < .003, d = 1.44$ )、「Q09. 英文法は難しい」( $t(20) = -2.80, p < .009, d = 1.20$ )、

「Q21. 英語をたくさん書いていけば自然と英文法の知識も身につく」( $t(20) = 3.73, p < .001, d = 1.60$ )、「Q40. 英文法の学習は好きだ」( $t(20) = 3.45, p < .003, d = 1.48$ )の4項目では1%水準で、「Q06. 英語の勉強の仕方が分からない」( $t(20) = -2.14, p < .045, d = 1.16$ )、「Q25. 中学・高校で英文法をあまり学ばなかった」( $t(20) = -2.46, p < .023, d = 1.05$ )、「Q30. 計画を立てて英語の勉強に取り組んでいる」( $t(20) = 2.12, p < .047, d = 1.21$ )、「Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」( $t(20) = 2.44, p < .022, d = 1.18$ )の4項目では5%水準で、文法得意群と文法不得意群との間で有意差が確認された。

表4 英文法得意群・不得意群の質問項目平均値とSD及びt検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	文法得意群	文法不得意群	t 値
Q02. 自分の英語力に自信がある	3.75 (1.14)	2.30 (0.82)	3.36**
Q06. 英語の勉強の仕方が分からない	3.00 (1.41)	4.30 (1.42)	-2.14*
Q09. 英文法は難しい	3.83 (1.64)	5.40 (0.67)	-2.80**
Q21. 英語をたくさん書いていけば自然と英文法の知識も身につく	5.17 (0.84)	3.90 (0.74)	3.73**
Q25. 中学・高校で英文法をあまり学ばなかった	2.42 (1.62)	3.90 (1.10)	-2.46*
Q30. 計画を立てて英語の勉強に取り組んでいる	3.67 (1.07)	2.70 (1.06)	2.12*
Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった	4.42 (1.38)	3.10 (1.10)	2.44*
Q40. 英文法の学習は好きだ	5.42 (1.00)	3.70 (1.34)	3.45**

\*p < .05, \*\*p < .01

### 3.5 スピーキングに対する得意・不得意の自己評価による比較

「英語4技能の中でスピーキングが一番得意だ」(質問39)という質問に対して、「6. 非常に当てはまる」・「5. 当てはまる」と回答した8名をスピーキング得

意群、「1. 全く当てはまらない」・「2. 当てはまらない」と回答した11名をスピーキング不得意群と分類し、質問39を除く全ての質問項目について、スピーキング得意群とスピーキング不得意群の2変数間の平均の差を比較した。



その結果 (表 5)、「Q02. 自分の英語力に自信がある」 ( $t(17) = 3.04, p < .007, d = 1.41$ )、「Q08. 英語をたくさん聞いていれば自然と英文法の知識も身につく」 ( $t(17) = 2.98, p < .008, d = 1.38$ )、「Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている」 ( $t(17) = 4.63, p < .000, d = 2.15$ )、「Q31. 普段から英語に触れるように心がけている」 ( $t(17) = 3.43, p < .003, d = 1.59$ ) の 4 項目では 0.1%~1% 水準で、「Q13. 英語をたくさん話していれば自然と英

文法の知識も身につく」 ( $t(17) = 2.13, p < .044, d = 0.99$ )、「Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」 ( $t(17) = 2.13, p < .048, d = 0.99$ ) の 2 項目では 5% 水準で、スピーキング得意群とスピーキング不得意群との間で有意差が確認された。また、「Q05. 英語を話すときに英文法の知識が役立った」 ( $t(17) = 1.71, p < .088, d = 0.79$ ) の 1 項目では、10% 水準で有意傾向 (効果量は中程度) が認められた。

表 5 スピーキング (S) 得意群・不得意群の質問項目平均値と SD 及び t 検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	S 得意群	S 不得意群	t 値
Q02. 自分の英語力に自信がある	4.13 (0.99)	2.82 (0.87)	3.04**
Q05. 英語を話すときに英文法の知識が役立った	5.50 (0.76)	4.73 (1.10)	1.71†
Q08. 英語をたくさん聞いていれば自然と英文法の知識も身につく	5.00 (0.93)	3.64 (1.03)	2.98**
Q13. 英語をたくさん話していれば自然と英文法の知識も身につく	5.00 (0.76)	4.18 (0.87)	2.13*
Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている	5.13 (0.84)	3.36 (0.81)	4.63***
Q31. 普段から英語に触れるように心がけている	5.50 (0.76)	4.18 (0.87)	3.43**
Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった	5.00 (1.41)	3.73 (1.19)	2.13*

†.05 < p < .10, \*p < .05, \*\*p < .01, \*\*\*p < .001

### 3. 6 リスニングに対する得意・不得意の自己評価による比較

「英語 4 技能の中でリスニングが一番得意だ」 (質問 22) という質問に対して、「6. 非常に当てはまる」・「5. 当てはまる」と回答した 15 名をリスニング得意群、「1. 全く当てはまらない」・「2. 当てはまらない」と回答した 7 名をリスニング不得意群と分類し、質問 22 を除く全ての質問項目について、リスニング得意群とリスニング不得意群の 2 変数間の平均の差を比較した。

その結果 (表 6)、「Q02. 自分の英語力に自信がある」 ( $t(20) = 4.69, p < .000, d = 2.15$ )、「Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにし

ている」 ( $t(20) = 4.22, p < .000, d = 1.93$ )、「Q30. 計画を立てて英語の勉強に取り組んでいる」 ( $t(20) = 2.93, p < .008, d = 1.34$ ) の 3 項目では 0.1%~1% 水準で、「Q31. 普段から英語に触れるように心がけている」 ( $t(20) = 1.96, p < .017, d = 1.20$ )、「Q34. 英語をたくさん読んでいれば自然と英文法の知識も身につく」 ( $t(20) = 2.61, p < .040, d = 0.82$ )、「Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」 ( $t(20) = 2.07, p < .031, d = 0.95$ ) の 3 項目では 5% 水準で、リスニング得意群とリスニング不得意群との間で有意差が確認された。

表 6 リスニング (L) 得意群・不得意群の質問項目平均値と SD 及び t 検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	L 得意群	L 不得意群	t 値
Q02. 自分の英語力に自信がある	3.67 (0.90)	1.86 (0.69)	4.69***
Q23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている	5.07 (1.03)	3.00 (1.16)	4.22***
Q30. 計画を立てて英語の勉強に取り組んでいる	3.60 (0.83)	2.43 (0.98)	2.93**
Q31. 普段から英語に触れるように心がけている	5.27 (1.10)	3.86 (1.35)	1.96*
Q34. 英語をたくさん読んでいれば自然と英文法の知識も身につく	2.88 (1.36)	4.08 (1.19)	2.61*
Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった	4.47 (1.36)	3.29 (0.95)	2.07*

\*p < .05, \*\*p < .01, \*\*\*p < .001

### 3. 7 リーディングに対する得意・不得意の自己評価による比較

「英語 4 技能の中でリーディングが一番得意だ」（質問26）という質問に対して、「6. 非常に当てはまる」・「5. 当てはまる」と回答した13名をリーディング得意群、「1. 全く当てはまらない」・「2. 当てはまらない」と回答した7名をリーディング不得意群と分類し、質問26を除く全ての質問項目について、リーディング得意群とリーディング不得意群の2変数間の平均の差を比較した。

その結果（表7）、「Q20. これまで英文法をあまり学んでこなかった」（ $t(18) = -2.74, p < .014, d = 1.28$ ）、「Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」（ $t(18) = 2.82, p < .011, d = 1.32$ ）の2項目では5%水準で、リーディング得意群とリーディング不得意群との間で有意差が確認された。また、「Q17. 英文法を学ぶとリスニング力が向上する」（ $t(18) = -1.75, p < .097, d = 0.82$ ）の1項目では、10%水準で有意傾向（効果量は大）が認められた。

表7 リーディング (R) 得意群・不得意群の質問項目平均値と SD 及び t 検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	R 得意群	R 不得意群	t 値
Q17. 英文法を学ぶとリスニング力が向上する	4.31 (0.86)	5.00 (0.82)	-1.75 <sup>†</sup>
Q20. これまで英文法をあまり学んでこなかった	1.85 (0.80)	3.43 (1.81)	-2.74*
Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった	4.77 (0.93)	3.14 (1.68)	2.82*

<sup>†</sup>.05 < p < .10, \*p < .05

### 3. 8 ライティングに対する得意・不得意の自己評価による比較

「英語 4 技能の中でライティングが一番得意だ」（質問10）という質問に対して、「6. 非常に当てはまる」・「5. 当てはまる」と回答した8名をライティング得意群、「1. 全く当てはまらない」・「2. 当てはまらない」と回答した13名をライティング不得意群と分類し、質問10を除く全ての質問項目について、ライティング得意群とライティング不得意群の2変数間の平均の差を比較した。

その結果（表8）、「Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」（ $t(19) = -2.97, p < .001, d = 1.80$ ）の1項目では1%水準で、「Q05. 英語を話すときに英文法の知識が役立った」（ $t(19) = 3.63, p < .034, d = 0.86$ ）、「Q08. 英語をたくさん聞いていれば自然と英文法の知識も身につく」（ $t(19) = 3.63, p < .035, d = 1.02$ ）、「Q09. 英文法は難しい」（ $t(19) = 3.63, p < .035, d = 1.02$ ）、「Q16. 英文法を知らなくても英語は読める」（ $t(19) = 3.63, p < .046, d = 0.96$ ）の4項目では5%水準で、ライティング得意群とライティング不得意群との間で有意差が確認された。また、「Q15. 英文法を学ばないと英語は習得できない」（ $t(19) = 1.89, p < .065, d = 0.88$ ）では、10%水準で有意傾向（効果量は大）が認められた。

表8 ライティング (W) 得意群・不得意群の質問項目平均値と SD 及び t 検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	W 得意群	W 不得意群	t 値
Q05. 英語を話すときに英文法の知識が役立った	5.75 (0.46)	4.85 (1.28)	2.31*
Q08. 英語をたくさん聞いていれば自然と英文法の知識も身につく	3.00 (1.69)	4.38 (1.12)	-2.27*
Q09. 英文法は難しい	3.38 (1.60)	4.85 (1.35)	-2.27*
Q15. 英文法を学ばないと英語は習得できない	4.50 (1.20)	3.31 (1.44)	1.96 <sup>†</sup>
Q16. 英文法を知らなくても英語は読める	2.88 (1.36)	4.08 (1.19)	-2.14*
Q38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった	5.00 (0.93)	3.23 (1.01)	4.01**

<sup>†</sup>.05 < p < .10, \*p < .05, \*\*p < .01

### 3. 9 英語熟達度の違いによる英文法の有用性に対する認識の比較

先述したとおり、中級レベル以上から無作為に抽出した10名を英語熟達度上位群、初中級レベル以下の12

名を英語熟達度下位群に分類し、英文法の有用性に関する4つの質問項目について、英語熟達度上位群と英語熟達度下位群の2変数間の平均の差を比較した。

その結果（表9）、「Q33. 英語を書くときに英文法

の知識が役立った」 ( $t(20) = 2.44, p < .021, d = 1.04$ ) の1項目において5%水準で、英語熟達度上位群と英語熟達度下位群との間で有意差が確認された。一方、「Q05. 英語を話すときに英文法の知識が役立った」 ( $t(20) = 1.37, p < .187, d = 0.59$ )、「Q19. 英語を聞くときに英文法の知識が役立った」 ( $t(20) = 1.29,$

$p < .212, d = 0.55$ )、「Q27. 英語を読むときに英文法の知識が役立った」 ( $t(20) = 1.23, p < .234, d = 0.53$ ) の3項目においては、英語熟達度上位群と英語熟達度下位群との間で有意差が確認されなかったが、何れも効果量は中程度であった。

表9 英語熟達度上位群・下位群の質問項目平均値とSD及びt検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	上位群	下位群	t値
Q05. 英語を話すときに英文法の知識が役立った	5.40 (0.70)	4.75 (1.36)	1.37
Q19. 英語を聞くときに英文法の知識が役立った	4.80 (0.92)	4.33 (0.78)	1.29
Q27. 英語を読むときに英文法の知識が役立った	5.30 (0.95)	4.83 (0.84)	1.23
Q33. 英語を書くときに英文法の知識が役立った	5.70 (0.68)	4.83 (0.94)	2.44*

\* $p < .05$

### 3. 10 英語熟達度の違いによる英文法と英語4技能向上の関係性に対する認識の比較

英文法と英語4技能向上の関係性に関する4つの質問項目について、英語熟達度上位群（中級レベル以上の10名）と英語熟達度下位群（初中級レベル以下の12名）の2変数間の平均の差を比較した。

その結果（表10）、「Q03. 英文法を学ぶとリーディング力が向上する」 ( $t(20) = 2.36, p < .029, d = 1.01$ )、「Q17. 英文法を学ぶとリスニング力が向上する」 ( $t$

$(20) = 2.12, p < .047, d = 0.91$ ) の2項目において5%水準で、英語熟達度上位群と英語熟達度下位群との間で有意差が確認された。また、「Q12. 英文法を学ぶとスピーキング力が向上する」 ( $t(20) = 2.00, p < .060, d = 0.85$ ) の1項目では、10%水準で有意傾向（効果量は大）が認められた。一方、「Q28. 英文法を学ぶとライティング力が向上する」 ( $t(20) = 1.21, p < .234, d = 0.52$ ) の1項目では、英語熟達度の違いによる有意差は確認されなかったが、効果量は中程度であった。

表10 英語熟達度上位群・下位群の質問項目平均値とSD及びt検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	上位群	下位群	t値
Q03. 英文法を学ぶとリーディング力が向上する	5.60 (0.84)	4.67 (0.99)	2.36*
Q12. 英文法を学ぶとスピーキング力が向上する	5.20 (1.14)	4.17 (1.27)	2.00 <sup>†</sup>
Q17. 英文法を学ぶとリスニング力が向上する	4.80 (1.03)	4.00 (0.74)	2.12*
Q28. 英文法を学ぶとライティング力が向上する	5.50 (0.71)	5.00 (1.13)	1.21

<sup>†</sup>.05 <  $p < .10$ , \* $p < .05$

### 3. 11 英語熟達度の違いによる英文法の習得方法に対する認識の比較

英文法の習得方法に関する4つの質問項目について、英語熟達度上位群（中級レベル以上の10名）と英語熟達度下位群（初中級レベル以下の12名）の2変数間の平均の差を比較した。

その結果（表11）、「Q08. 英語をたくさん聞いていけば自然と英文法の知識も身につく」 ( $t(20) = -1.03, p < .315, d = 0.44$ )、「Q13. 英語をたくさん話していれば自然と英文法の知識も身につく」 ( $t(20) = 1.19, p < .249, d = 0.51$ ) の2項目において5%水準で、英

語熟達度上位群と英語熟達度下位群との間で有意差が確認された。また、「Q21. 英語をたくさん書いていけば自然と英文法の知識も身につく」 ( $t(20) = 1.51, p < .146, d = 0.65$ ) の1項目では、10%水準で有意傾向（効果量は大）が認められた。一方、「Q34. 英語をたくさん読んでいけば自然と英文法の知識も身につく」 ( $t(20) = 2.38, p < .027, d = 1.02$ ) の1項目では、英語熟達度の違いによる有意差は確認されなかったが、効果量は中程度であった。

表11 英語熟達度上位群・下位群の質問項目平均値とSD及び *t* 検定の結果

括弧外：平均 / 括弧内：SD	上位群	下位群	<i>t</i> 値
Q08. 英語をたくさん聞いていれば自然と英文法の知識も身につく	3.30 (1.64)	3.92 (1.17)	-1.03
Q13. 英語をたくさん話していれば自然と英文法の知識も身につく	4.40 (1.65)	3.75 (0.87)	1.19
Q21. 英語をたくさん書いていれば自然と英文法の知識も身につく	4.90 (1.52)	4.08 (1.00)	1.51
Q34. 英語をたくさん読んでいれば自然と英文法の知識も身につく	5.30 (0.95)	4.42 (0.79)	2.38*

\* $p < .05$ 

#### 4. 考察

##### 4. 1 英語力に対する自信の有無と英文法に対する意識・態度・行動

英語力に対して自信のある学習者とそうでない学習者との間の違いは、「英文法が得意だ」( $p < .003$ )と「英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」( $p < .005$ )の2つの項目において顕著であった(1%水準)。また、「中学・高校で英文法をあまり学ばなかった」( $p < .027$ )や「英文法を知らなくても英語は読める」( $p < .031$ )においても、5%水準で英語力に対して自信のある学習者とそうでない学習者との間に有意差が認められた。

これらの結果から、英語力に自信のある学習者は、中学・高校で英文法をしっかりと学び、英文法が得意で、英文読解には文法知識が不可欠であることを十分認識していることが分かる。また、英語力に自信のある学習者は、英語の学習を通して日本語に対する理解も深まったと回答しているが、英文法の学習を通して日本語と英語の違いや類似点を分析的且つ意識的に学んだこととも無関係ではないと思われる。一方、英語力に自信のない学習者は、中学・高校における英文法の学習が不十分で、英文法が不得手であり、英文読解における英文法の意義をあまり認識していないということが伺える。

自信の有無は、第二言語習得の成否や学習意欲の増減に影響を及ぼす重要な要素である。中学・高校における英文法学習の程度や習熟度が自信涵養の要件の一つであるならば、英文法を学ぶ意義や重要性がこのほか強調され、英文法の学習・指導の充実が図られる必要があると言えよう。

##### 4. 2 英語熟達度の差異と英文法に対する意識・態度・行動

英語熟達度上位群と下位群との間の違いは、「英文法は得意だ」( $p < .001$ )という質問項目において最も

顕著で、1%水準で両群間に有意差が確認された。この結果は、英文法に習熟することが、英語熟達度の向上においても不可欠であることを示唆している。英文法の習熟度が情意的側面に影響を及ぼすことは先に確認したとおりであるが、技能的側面においても大きな差異をもたらすことが示されたと言えるだろう。英文法を学ばなくても英語は出来るようになるといった言説がしばしば聞かれるが、決してそうではないことをこの結果は示している。

また、「英語4技能の中でライティングが一番得意だ」( $p < .023$ )と「英語を書くときに英文法の知識が役立った」( $p < .024$ )の2項目においても、英語熟達度上位群と下位群との間に有意差(5%水準)が確認されたが、ライティング能力の下位知識に文法能力が含まれることを考えると、当然の結果と言えよう。特筆すべきは、英語熟達度上位群においては、英文法の知識を、実際の言語使用場面において活用・応用できているという点である。一方、英語熟達度下位群は、そもそも文法知識が十分とは言い難い状況であることが推察されるが、知識を活用することにおいても課題が見られる。このことはまた、英文法の知識が活用されるためには、ある程度知識の習得が行われていることが前提となることを示唆しているとも言えるだろう。

さらに、「英語をたくさん読んでいれば自然と英文法の知識も身につく」( $p < .027$ )という質問項目において、英語熟達度の違いによる有意差(5%水準)が確認されたことも注目に値する。英文法の学習と言え、英文法の参考書を紐解いたり、文法の問題演習に取り組んだりすることだと多くの学習者は考えることだろう。学習の初期段階においては、確かにそのような明示的学習が必要不可欠と言っても過言ではない。しかし、明示的学習を通して得られた明示的知識は、その知識を実際に活用する手続き化のプロセスを経なくては、自動化された暗示的知識へと変化を遂げることはできない。たくさん読む(=多読)という行為は、



まさしく手続き化のプロセスであり、その行為が英文法の知識習得を可能にするという回答が英語熟達度上位群から有意な差をもって得られたことは、第二言語習得の理論に符合するものであると同時に、英文法の学習・指導の在り方に示唆を与えるものでもあると言える。

#### 4. 3 中学・高校における英文法学習の実態と英文法に対する意識・態度・行動

「積極的に資格試験（英検／TOEIC等）に挑戦している」という質問項目において、中学・高校における英文法学習群と英文法非学習群との間に最も顕著な違いが認められた ( $p<.001$ )。また、「計画を立てて英語の勉強に取り組んでいる」という質問項目では、有意差こそ確認されなかったものの、優位傾向があることが認められた ( $p<.079$ )。これらの結果が意味するところは、中学・高校において英文法学習の充実を図り、英文法の明示的知識の習得を促すことが、自律的な学びを可能にするということである。さらに、自律的な学びを通して、学習全体の管理・調整に関する間接的学習方略に分類され、学習目標や計画を明確化する方略を含むメタ認知方略 (Metacognitive Strategies) の使用も可能になる。日本のように外国語として英語を学ぶ環境においては、教室外で生活言語として英語に触れる機会ほぼ皆無である。しかしながら、教室外における学びだけでは、質・量ともに十分とは言えない。従って、教室外における自律的な学びが必要不可欠となるが、その前提となるのが英文法の学習・習得であることが本研究の結果から明らかになったと言えるだろう。

#### 4. 4 英文法に対する得意・不得意の自己評価と英文法に対する意識・態度・行動

英文法が得意な学習者と不得意な学習者との間の違いは、「英語をたくさん書いていけば自然と英文法の知識も身につく」 ( $p<.001$ ) という質問項目において最も顕著であった (1%水準)。また、「英文法の学習は好きだ」 ( $p<.003$ ) と「自分の英語力に自信がある」

( $p<.003$ ) の2項目においても、1%水準で両群間に有意差が確認された。英文法の習熟度と自信との関係については既述したが、改めてその関係性が確認された。また、好きであることと得意であることは、卵が

先か鶏が先かという議論に共通する部分があるが、英文法に対して苦手意識を感じさせない工夫や、出来るという達成感が実感できるような仕掛けが、指導に際しては求められると言えるだろう。さらに、「英語をたくさん書くことによって英文法の知識が習得される」と英文法を得意とする学習者が回答しているが、この結果は、読むことと同様に書くという知識を実際に活用する知識の手続き化が重要であることを示唆している。書くという行為は、読む相手の存在を前提とし、極めてコミュニカティブな言語活動と言える。また、口頭による会話とは異なり、時間的な猶予が与えられた状況下で、明示的知識をモニタリングしながら取り組むことができ、そのことが英文法の知識習得をより一層効果的なものに行っているのではないだろうか。文法指導を中心とする授業においては、スピーキング活動が数多く行われているが、ライティング活動についてもより多く計画・実施されることが望まれる。

#### 4. 5 英語4技能の得意分野と英文法に対する意識・態度・行動

英語4技能のうちスピーキングを得意とする学習者は、「英語をたくさん聞いていけば自然と英文法の知識も身につく」 ( $p<.008$ )、「英語をたくさん話していれば自然と英文法の知識も身につく」 ( $p<.044$ ) の2つの質問項目において、有意な差をもって肯定的に回答している。インプットとアウトプットの違いこそあれ、聞くことも話すことも音声重視の言語活動であり、得意分野の取り組みを通して英文法の習得が効果的に行われる可能性を示唆している。

また、リスニングを不得意とする学習者は、「英語をたくさん読んでいけば自然と英文法の知識も身につく」 ( $p<.040$ ) という質問項目で、有意な差をもって肯定的に回答しているが、この結果からも、英文法の習得が得意な分野の取り組みを通して行われ得ることが伺える。

次に、リーディングを得意とする学習者は、「これまで英文法をあまり学んでこなかった」 ( $p<.014$ ) という質問項目で、有意な差をもって否定的に回答している。即ち、リーディングを得意とする学習者は英文法をしっかりと学習してきたということであり、このことは、リーディング力の向上には英文法の理解・習得が不可欠であることを示唆している。

最後に、ライティングを得意とする学習者は、「英語を学ぶことで日本語の理解も深まった」( $p<.001$ )という質問項目で、有意な差をもって肯定的に回答している。さらに、「英文法を学ばないと英語は習得できない」( $p<.065$ )という質問項目では、有意傾向に留まるものではあったものの、肯定的に回答している。ライティングでは、他の技能以上に英語の論理的思考が求められるため、日本語との違いに対峙する中で、結果的に日本語の理解伸長に結びつくのかもしれない。また、スピーキングとは異なり、ライティングでは正確性が求められることから、ライティングを得意とする学習者は、正確性を担保する英文法の学習が英語習得において極めて重要であることをより強く認識しているのだと思われる。

#### 4. 6 英語熟達度の差異と英文法に対する意識・態度・行動

英語の文法知識の活用・習得、さらに文法知識と英語4技能の向上との関係について、英語熟達度の差異による違いが見られるかを比較した結果、英語熟達度の高い学習者は、「英語を書くときに英文法の知識が役立った」( $p<.021$ )、「英文法を学ぶとリーディング力が向上する」( $p<.029$ )、「英文法を学ぶとリスニング力が向上する」( $p<.047$ )、「英語をたくさん読んでいれば自然と英文法の知識も身につく」( $p<.027$ )の4項目において、有意な差をもって肯定的に回答していた。

第一に、文法知識の活用についてであるが、英文法の明示的知識の習得が活用の前提となる。弱形のインターフェイスの立場に立脚すると、明示的知識の保有が言語形式への注意喚起を可能にし、その結果、言葉への気づきが促され、より正確な理解・表現へと至る。従って、英語を書く際に英文法の知識が役立った(＝活用できた)という英語熟達度の高い学習者の回答から、英文法の明示的知識習得の必要性が改めて浮き彫りになったと言えよう。また、この結果は、分析的に知識を参照し取り組むことができるライティングの特性とも少なからず関係していると思われる。

次に、文法知識と英語4技能の向上との関係についてであるが、リーディング力とリスニング力の向上に英文法の知識習得が大きく影響しているという結果が得られた。ライティングやスピーキングが表現型の技

能であるのに対し、リーディングやリスニングは理解型の技能である。インプット仮説によると、学習者は理解可能なインプット (comprehensible input) に触れることによって言語を習得することができることとされる。即ち、リーディングやリスニングを通して理解できるインプットに触れることが言語習得の条件と言えるわけだ。従って、インプット仮説に依拠すれば、リーディング力やリスニング力の向上は言語習得の重要な鍵であり、それを支える文法知識の習得は尚更重要であると言えよう。

最後に、文法知識の習得についてであるが、英語をたくさん読むこと(＝多読)が英文法の知識習得に有益であることが確認された。明示的知識から暗示的知識への変換には手続き化というプロセスが不可欠であることは先述したが、まさしく、たくさん読む(＝多読)という行為そのものが手続き化であり、その重要性を確認できたことは意義深いことだと言えるだろう。特に中学校では、教科書の内容がダイアログ形式のものへと刷新され、まとまった文章を読む機会が少なくなっている。授業内容も会話重視の方向へと進む中で、読む行為が軽視されているように思われる。英語が話せるようになりたいという思いは多くの日本人英語学習者に共通するものであると思うが、読みの重要性が今一度見直される必要があるのではないだろうか。

### 5. 英文法の学習・指導方法への示唆

#### 5. 1 明示的指導の意義(学習者の自律、メタ認知方略の習得・活用、気づきの促進)

本研究の結果から、英文法の明示的知識を習得することの有用性が確認された。明示的な文法知識を有することで、自律的な学びが促進され、さらには学習全体の管理・調整に関わるメタ認知方略の習得・使用が可能になる。先述したとおり、外国語として英語を学ぶ環境にあっては、教室外での自律的な学習が不可欠である。英文法の明示的知識の習得が、自律した学習者を育む条件の一つであるとしたら、決して軽視することはできない。しかしながら、会話重視の昨今の英語教育の流れの中で、文法指導における説明が省略されたり軽く扱われたりするケースも散見される。小学生の場合や中学1年生のように、認知的発達が未熟な学習段階においては、明示的に説明するよりも具体的な使用場面でターゲットとなる言語形式を実際に使う

ことがその習得に効果的である場合もあるだろう。しかしながら、学習が進むにつれて内容も高度化・複雑化し、明示的な説明なしに理解することが困難な状況が生じ得る。また、学習者の認知的発達に伴い分析的思考能力が高まってくると、明示的に学習する方がより効率的であるとも言われている。さらに、明示的学習によって得られた明示的知識は、言語習得の鍵を握る「気づき」を可能にしてくれる。このように、明示的学習の利点は多岐に渡る。指導に際しては、文法の形式・意味・機能をシンプルに分かりやすく説明することに留意する。その際、具体的な使用場面に即して、文脈の中で例文を提示することも大切なポイントである。また何よりも、教師が一方向的に説明を行うのではなく、学習者に対して問いを投げかけながら、インタラクティブなやり取りを通して答えを引き出していくことが肝要である。

## 5. 2 知識の手続き化（実際に使う活動・体験）を重視した指導

明示的知識の習得が重要であることは先述したとおりであるが、決してそれがゴールではない。やはり最終的な目標は、暗示的知識（＝無意識的に活用できる知識）の習得であることは言うまでもない。強いインターフェイスの立場に立脚すれば、明示的学習で得られた明示的知識は、何度も練習を重ねること、即ち、手続き化を行うことで暗示的知識へ変換することが可能である。その際、言語形式にのみ注意を向けさせる「機械的な練習」に偏重することなく、形式と意味の結びつきに意識を向けさせる「意味的な練習」を十分行うことが重要である。また、言葉には理解と表現の二つの側面がある。従って、英語4技能のバランスを考慮し、学習者の発達段階を踏まえたインプット・アウトプットの機会を創出することが望まれる。さらに、言語使用の必然性を作り出すことにも留意したい。

## 5. 3 得意分野を生かした文法学習・指導（4技能の統合）

本研究の結果から、英語4技能の中で学習者が得意とする領域の取り組みを通して英文法の学習・指導を行うことで、文法知識の習得が効果的に行われる可能性が示唆された。学習者個人の学習であれば、そのまま得意分野の学習と関連付けながら英文法の学習に取

り組むことは困難なことではないが、多様な学習者が共存する教室内においては、個別に対応することは容易ではない。そこで、4技能をバランス良く統合させた文法指導を提案したい。一般に、「導入」・「説明」・「練習」・「活動」という4つの要素から構成される文法指導において、「活動」が中心的な取り組みに位置づけられるが、往々にして会話活動が主流となっている。英語4技能のうちスピーキング・リスニングを得意とする学習者にとっては効果的な学びの機会を得られるかもしれないが、ライティング・リーディングを得意とする学習者にとっては必ずしもそうとは言えない。そこで、会話偏重に陥ることがないように、ライティングやリーディングの取り組みも「活動」の中で行われることが望ましい。ライティングは読み手を前提とした極めてコミュニケーション的な行為である。また、スピーキングのように瞬時に行われる言語活動と異なり、明示的知識を有効に活用し、学習者個々のレベルやペースに合わせて取り組むことも可能である。従って、ライティングは英文法の習得にはうってつけと言えるだろう。また、英文法指導にリーディングを取り入れる際には、ターゲットとなる文法項目を含む英文の理解が前提となるような発問を行うなどの工夫が必要である。そうすることで、内容理解に加え言語形式へも意識を向けさせることが可能となる。つまり、リーディング活動にフォーカス・オン・フォームの視点を取り入れることで、文法知識の理解・習得が強化されると言える。

## 6. 結語

本研究では、大学生の英文法に対する意識・態度・行動について、量的研究手法を用いて分析を試みた。その結果、英文法に習熟することが自信の涵養や英語熟達度の向上と密接に関係していることを明らかにした。また、中学・高校において英文法学習の充実を図ることが、学習者の自律を促し、学習全体の管理・調整に関わるメタ認知的方略の習得・使用を可能にし得ることも確認できた。さらに、英語4技能の中で学習者が得意とする分野の取り組みを通して英文法を学習することで、学習効果が高まる可能性についても示すことができた。加えて、英文法の明示的知識の習得が多岐に渡って重要であることを改めて示した。

これらの結果を踏まえ、英文法の学習・指導方法へ



の提案として、明示的な文法指導の意義、知識の手続き化を通して明示的知識から暗示的知識へと変換を図ることの重要性、そしてインプットとアウトプットのバランスを図りながら4技能を統合した文法指導を行うことの必要性を説いた。

今日の英語科教育においては、コミュニケーションが重視される一方で、その下位知識を構成する文法の学習・指導が軽視される風潮にあるが、外国語として英語を学ぶEFL (English as a foreign language) の環境にあつては、また、学習者の母語の習得が確立された後であれば、やはり文法の学習が重要であることを、本研究では量的データに基づいて示すことができた。

成果の一つとして、英語4技能の中で学習者が得意とする分野の取り組みを通して英文法の習得が効果的に行われる可能性を示したが、本研究においては、あくまでもその可能性が示唆されたに過ぎない。今後の課題として、それを検証するための実証的研究を実施したいと考えている。

## 謝 辞

アンケート調査の回答に協力して頂いた学生の皆さんに心より感謝致します。また、アンケート調査の実施に際し、ご協力下さった教職科目の担当教員に対しても、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

## 参考・引用文献

- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・柁木貴之・王林鋒・三瓶ゆき (2013) 「文法学習に関わる要因の教科横断的検討」、東京大学大学院教育学研究科紀要、第53巻、173-180
- Canale, M. (1983) From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. E. Richards & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp.2-27). Harlow, UK: Longman
- Crystal, D. (2012) *English as a Global Language*, 2<sup>nd</sup> Edition, UK: Cambridge University Press
- 廣森友人 (2015) 「英語学習のメカニズム：第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法」、東京：大修館書店
- 堀口誠信 (2011) 「英語教育に関する啓蒙活動の必要性：『英法通りでは生きた英語にならない』に見られる誤解」、徳島文理大学研究紀要、第81号、31-42
- 和泉伸一 (2016) 「第2言語習得と母語習得から『言葉の学び』を考えるーより良い英語学習と英語教育へのヒント」、東京：アルク
- 猫田英伸 (2015) 「コミュニケーションを支える文法力の育成ーProcessing Instruction (PI) に焦点を当ててー」島根大学教育学部紀要、第48巻別冊、31-40
- 大津由紀雄 (2013) 「英語教育、迫り来る破綻」、東京：ひつじ書房
- 斉田智里 (2014) 「英語学力の経年変化に関する研究：項目応答理論を用いた事後的等化法による共通尺度化」、東京：風間書房
- 田村聡子 (2009) 「英文法の基礎力低下と英語嫌いの原因を探る：新入生アンケートと英語診断テストから分析される要因」、釧路工業高等専門学校紀要、第43号、75-79
- 田中武夫・田中知聡 (2014) 「英語教師のための文法指導デザイン」、東京：大修館書店
- 寺島隆吉 (2009) 「英語教育が減びるときー『英語で授業』のイデオロギー」、東京：赤石書店
- 卯城祐司 (2014) 「英語で教える英文法ー場面で導入、活動で理解」、東京：研究社



付 録

英文法に関する意識調査

これは、皆さんに、英文法に関する考えをお聞きするアンケートです。一般論としてではなく、**自分自身のこととして**回答して下さい。また、正しい答えや間違った答えというものはありませんので、思ったとおりに答えて下さい。

このアンケート調査は、「パートⅠ」と「パートⅡ」から構成されていて、裏面にも質問項目があります。それぞれの質問をよく読み、全ての質問について回答して下さい。回答もれないようにお願いします。

なお、「パートⅠ」には、個人的な内容に関する質問も含まれていますが、回答は全て匿名として扱いますので、率直にお答え下さい。宜しくお願いいたします。

「パートⅠ」

1. あなたの性別に○をつけて下さい。 ( 男 ・ 女 )
2. あなたの年齢はいくつですか。 ( ) 歳
3. あなたの所属学年に○をつけて下さい。 ( 1年 ・ 2年 ・ 3年 ・ 4年 ・ 5年 ・ 6年以上 )
4. あなたが英語の学習を始めたのは何歳の時ですか。 ( ) 歳  
[※学校以外の英会話教室なども含みます]
5. 現在、大学の授業以外で英語を学んでいますか。 ( はい ・ いいえ )  
[※塾や英会話教室など]
6. 現在、1日に平均どのくらい英語の学習をしていますか。[※大学の授業以外の学習時間の総計] ( 30分未満 ・ 30分 ・ 1時間 ・ 2時間 ・ 3時間以上 )
7. 英語4技能のうち、最も重要だと思うのはどれですか。 ( リスニング ・ スピーキング ・ リーディング ・ ライティング )
8. 英語4技能のうち、どれに一番力を入れて学習していますか。 ( リスニング ・ スピーキング ・ リーディング ・ ライティング )
9. 現在のあなたの英語力はどのレベルですか。下から1つ選び、右の数字に○をつけて下さい。 ( 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 )

**1. 「基礎レベル」(＝英検4級以下/TOEIC260点以下)**

決まり文句を用いて簡単な挨拶ができる。簡単な文章が読め、短い文章の大意が理解でき、基礎的な英語を用いて簡単な一文を書くことができる。

**2. 「初級レベル」(＝英検3級程度/TOEIC270～440点程度)**

挨拶や人の紹介などの簡単な会話ができる。簡単な文章が読め、基礎的な英語を用いて簡単な文章を書くことができる。

**3. 「初中級レベル」(＝英検準2級程度/TOEIC450～520点程度)**

日常生活の身近な事柄についての会話ができる。日常生活の身近な事柄についての文章が読め、簡単な手紙を書くことができる。

**4. 「中級レベル」(＝英検2級程度/TOEIC530～720点程度)**

日常生活の一般的な事柄に関する会話ができる。日常生活の一般的な事柄に関する文章が読め、簡単な文章を書くことができる。

**5. 「中上級レベル」(＝英検準1級以上/TOEIC730点以上)**

日常生活の一般的な事柄や専門的な事柄について会話ができ、講義や放送の大意を理解できる。新聞などの高度な英文を読め、自分の考えを書くことができる。

10. あなたは外国へ行ったことはありますか。 ( ある ・ ない )
11. 質問10で、「ある」と答えた方は、右の(1)～(4)の項目に記入して下さい。 (1) 渡航先の国名(訪れた外国の名前)

【記入例】(複数ある場合は/で区切って記入)

- (1) 渡航先の国名 … アメリカ/フィリピン
- (2) 渡航時期 …… 14歳/19歳
- (3) 渡航期間 …… 1か月/6か月
- (4) 渡航目的 …… ホームステイ/留学

(2) 渡航時期(訪れた時の年齢)

(3) 渡航期間(訪れた外国へ滞在した期間)

(4) 渡航目的(何をするために外国へ行ったか)

「パートⅡ」

次の質問項目は、あなたなどの程度当てはまりますか。「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(6点)」までのうち、最も当てはまると思う数字に○をつけて下さい。質問項目は全部で40項目あります。

	全く 当ては まらな い	当 ては まら ない	あ ま り 当 て は ま ら ない	や や 当 て は ま る	当 て は ま る	非 常 に 当 て は ま る
【記入例】 もしあなたが、次の質問項目の内容と全く同じ考えを持っている場合、 次のように記入します。  「朝食をしっかり摂ることは重要だ。」 1・2・3・4・5・ <b>6</b>						
1. 英文法は得意だ。	1	2	3	4	5	6
2. 自分の英語力に自信がある。	1	2	3	4	5	6
3. 英文法を学ぶと、リーディング力が向上する。	1	2	3	4	5	6
4. 異文化に興味がある。	1	2	3	4	5	6
5. 英語を話すときに、英文法の知識が役立った。	1	2	3	4	5	6
6. 英語の勉強の仕方が分からない。	1	2	3	4	5	6
7. 中学・高校で、英文法をしっかり学んだ。	1	2	3	4	5	6
8. 英語をたくさん聞いていれば、自然と英文法の知識も身につく。	1	2	3	4	5	6
9. 英文法は難しい。	1	2	3	4	5	6
10. 英語4技能の中で、ライティングが一番得意だ。	1	2	3	4	5	6
11. 英文法を知らなくても、英語は書ける。	1	2	3	4	5	6
12. 英文法を学ぶと、スピーキング力が向上する。	1	2	3	4	5	6
13. 英語をたくさん話していれば、自然と英文法の知識も身につく。	1	2	3	4	5	6
14. 英文法の学習は好きではない。	1	2	3	4	5	6
15. 英文法を学ばないと、英語は習得できない。	1	2	3	4	5	6
16. 英文法を知らなくても、英語は読める。	1	2	3	4	5	6
17. 英文法を学ぶと、リスニング力が向上する。	1	2	3	4	5	6
18. 英語を話すときは、とても緊張する。	1	2	3	4	5	6
19. 英語を聞くときに、英文法の知識が役立った。	1	2	3	4	5	6
20. これまで英文法をあまり学んでこなかった。	1	2	3	4	5	6
21. 英語をたくさん書いていれば、自然と英文法の知識も身につく。	1	2	3	4	5	6
22. 英語4技能の中で、リスニングが一番得意だ。	1	2	3	4	5	6
23. 積極的に英語を使ってコミュニケーションをとるようにしている。	1	2	3	4	5	6
24. 英文法を知らなくても、英語は聞き取れる。	1	2	3	4	5	6
25. 中学・高校で、英文法をあまり学ばなかった。	1	2	3	4	5	6
26. 英語4技能の中で、リーディングが一番得意だ。	1	2	3	4	5	6
27. 英語を読むときに、英文法の知識が役立った。	1	2	3	4	5	6
28. 英文法を学ぶと、ライティング力が向上する。	1	2	3	4	5	6
29. 積極的に英語の資格試験(英検/TOEICなど)に挑戦している。	1	2	3	4	5	6
30. 計画を立てて、英語の勉強に取り組んでいる。	1	2	3	4	5	6
31. 普段から、英語に触れるように心がけている。	1	2	3	4	5	6
32. 英語は好きではない。	1	2	3	4	5	6
33. 英語を書くときに、英文法の知識が役立った。	1	2	3	4	5	6
34. 英語をたくさん読んでいれば、自然と英文法の知識も身につく。	1	2	3	4	5	6
35. 英文法を知らなくても、英語は話せる。	1	2	3	4	5	6
36. 英語は好きだ。	1	2	3	4	5	6
37. 大学に入って、英文法をしっかり学んだ。	1	2	3	4	5	6
38. 英語を学ぶことで日本語の理解も深まった。	1	2	3	4	5	6
39. 英語4技能の中で、スピーキングが一番得意だ。	1	2	3	4	5	6
40. 英文法の学習は好きだ。	1	2	3	4	5	6

ご協力ありがとうございました！

# **A Quantitative Study on University Students' Consciousness, Attitude and Behavior toward English Grammar: Suggestions for Better Ways of Learning and Teaching English Grammar**

**Naoto Oshiro**

## **Abstract**

The present study investigated university students' consciousness, attitude and behavior toward English grammar by way of quantitative approach. The results showed that deepening grammatical knowledge could boost learners' confidence as well as increase the degree of English proficiency. It was also revealed that the sufficient learning of English grammar at junior and senior high school could help encourage independence in learners and enable them to both acquire and use the metacognitive strategies such as setting goals and making learning plans. Moreover, it was indicated that learning of English grammar could best take place while learners working on the tasks in their most favorite language skill out of four: listening, speaking, reading and writing. Furthermore, the importance of acquiring explicit knowledge of English grammar was proved in various aspects. Based on these results, better ways of learning and teaching English grammar were also proposed.

**Keywords:** English Grammar, Proficiency, Confidence, Four Skills, Learning and Teaching